



タウトの家「タウテスハイム」に滞在して

田中辰明

今年2024年の7月、私はベルリンを訪れた。そこに立ち並ぶタウト設計の「ジードルング」4件が世界文化遺産に登録されていることは知っていた。しかし、その時、さらにもう一件、オンケルトムズヒュッテのジードルングを新たに登録するための準備が進んでいることを知った。タウトの設計に基づく馬蹄形住宅(写真1)、(写真2)^{註1)}



写真1 ベルリンブリッツの馬蹄形住宅(2008年にユネスコ世界文化遺産に登録)

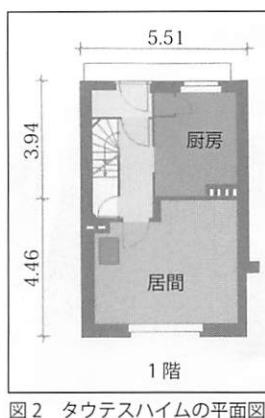
は、ベルリン市のブリッツ地区にありとりわけ有名であり、その美しさと独創性に多くの見学者が引き寄せられている。1925年から1930年の間に建設されたこの住宅群は、現在約5000人が住まう場所となっている。そして、その中に、第二次世界大戦の荒廃を耐え抜いた独立住宅が存在する。



写真2 ベルリンブリッツの馬蹄形住宅(自然に存在した馬蹄形の池を取り囲むように住宅が存在する)



図1 馬蹄形住宅とタウテスハイム(TAUTESHEIM)の位置 (Googlemap)



その住宅を所有するカトリーン・レッサーさんは、タウトファンのためにその家を「タウテスハイム」^{註2)}として貸し出している。彼女の曾祖父ルドヴィック・レッサーは庭園建築家であり、タウトと共に働いた人物だった。彼女自身も庭園建築家であり、この縁を大切にして馬蹄形住宅の保全に力を注いでいる。その家はベルリンの地下鉄1号線のパルヒマー・アレー駅からわずか50メートルの距離にあり、私はその場所に滞在する機会を得た。馬蹄形住宅とタウテスハイムの位置関係を図1に示す。これはGooglemapによるものである。図1の左下にTAUTESHEIMとの記述がある。良くご覧頂くと細長い敷地の上方に建物が建っていて、この敷地が連なっている。同じような形状の建物が連なっているという事である。どの住宅も敷地の奥に建っており、住宅の前は果樹などが植栽された庭園である(写真3)。

その住宅に足を踏み入れた瞬間から、タウトの色彩感覚が部屋ごとに息づいていることに感銘を受けた。彼の設計には、若き日の無邪気さと大胆さを感じられる。しかし、特に私の印象に残ったのは、2階へ続く急な階段



だった(写真4)。これは私がトランクを2階の寝室に運ぼうとした時、あまりの急勾配に足元が危うくなり、トランクと共に階段を転げ落ちそうになったためである。

建物の平面図を図2に示す。現在は地上2階、地下1階の作りである。タウトが設計した時は屋根裏部屋があり、洗濯物干場と、使用していない家具などの収納場所として使用されていた。屋根も切妻構造であったが、改

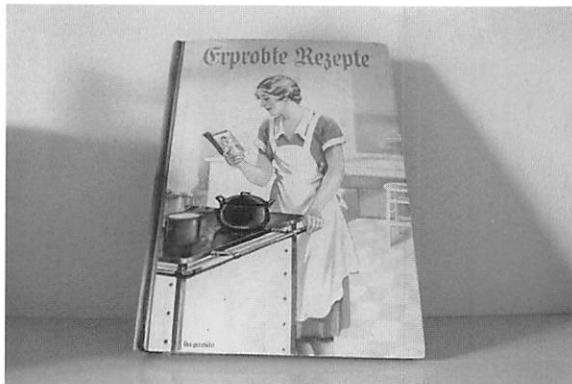


写真7 1920年代に読まれた調理法の書籍



写真8 タウテスハイムの居間兼書斎でくつろぐタウトの曾孫で女優のジェニー・シリースさん

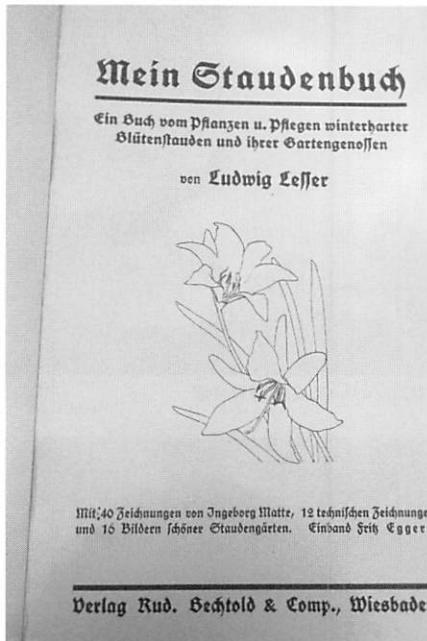


写真9 カトリン・レッサーさんの曾祖父ルドビック・レッサーさんの著書「私の多年草（Mein Staudenbuch）」



写真10 主婦必携の書（Das Reich der Hausfrau）

宅では同じタイプのものが使用されていた。大量生産する事で、価格の低減を図ったものである。我々はこの住宅に滞在中朝食はこの食堂で摂ったが、昼食、夕食は外部のレストランで摂った。やはり料理をすることは食材の購入、調理、食後の洗い付けを考えるとかなりの時間を取ってしまう。折角旅行にきて、そのような時間を浪費するより、外部で土地の料理を食べた方が有効であると考えた次第である。1階の奥には書斎兼居間がある。我々がタウテスハイム滞在中にタウトの孫娘であるクリスチーネ・シリースさんとその娘さんジェニー・シリースさんの来訪を受けた。その時居間でお迎えしたが、その時の様子を写真8に示す。この写真の右には読書机があり書棚にはタウトに関連する書籍が並んでいた。この住宅の所有者カトリン・レッサーさんの曾祖父ルドビック・レッサーさんの造園術に関する本も並んでいた。本のタイトルは「私の多年草の本」(Mein Staudenbuch)というもので、著者の植物特に花のスケッチが素晴らしいかった(写真9)。その他当時主婦にとって必携の本であったろ

修時に陸屋根になった。各階は幅5.51m、奥行き8.4m、面積は46.3m²である。1階には書斎兼居間と厨房兼食堂の2間がある。厨房兼食堂を写真5と写真6に示す。写真5には調理台とその左に食事のテーブルが見える。写真6には1920年代に使用されていた電気オーブンが見える。もちろん現在に合わせて電子レンジも使用できるようになっていた。当然冷蔵庫も備えられていた。調理台の上には当時の主婦が愛読したであろう、調理法の本が備えられていた(写真7)。この厨房兼食堂はGEHAG^{註1)}型厨房と呼ばれ、ブリツツ(Britz)のタウト設計の住



写真 11 タウテスハイム 2階の寝室。



写真 12 タウテスハイム 2階の寝室、カッフェルオーフェン



写真 13 タウテスハイム 2階の子供部屋



写真 14 タウテスハイム 2階の子供部屋カッフェルオーフェン



写真 15 タウテスハイム 2階のシャワー室、トイレ兼洗面室



写真 16 タウテスハイム 2階の階段踊り場

う「主婦の必読書」(Das Reich der Hausfrau)という本も並んでいた(写真10)。この本も1920年代に出版されたものであるが、衣食住、家族の病気看護、家庭での治療、まさに家政学全般にわたる教科書であった。筆者は某建設会社に勤務していたが、1992年にお茶の水女子大学に生活科学部を作り、住居部分を拡充するので、来ないかとの誘いを受けた。当時は自分に本当にこの職が

務まるか、不安であった。然し「案ずるより産むが易し」のいわれのとおり、優秀な学生さんが集まってくれ、研究室を盛り上げてくれた。しかし私の採用辞令は改組以前であったので、「家政学部教授を命ず」であった。したがって、この書物に大きな興味を持ったのである。

2階には寝室がある(写真11)(写真12)。寝室は1920年代はカッヘルオーフェンで暖房が行われていた。カッ



写真17 ブリッツの館



写真18 ブリッツの館内部

ヘルオーフェンは暖房器具としてだけではなく、室内の装飾調度品としての役割を果たしていた。ただしここのかッヘルオーフェンは労働者クラスが用いた、極めて単純なものである(写真12)。2階には子供部屋もある(写真13)(写真14)。この部屋にもかッヘルオーフェンが備えられていた。2階にはシャワー室、兼便所と洗面室がある(写真15)。ここにバスタブは存在しない。バスタブが存在しないのは、この住宅が労働者用であったというのが理由ではない。ドイツは殆どの国民はキリスト教徒である。キリスト教徒は宗教上の理由から入浴を好まない。せいぜいシャワーを使用する程度である。2階の寝室を出ると階段を登り切った場所の踊り場がある(写真16)。

タウテスハイムで過ごした時間は私にとって至福のひとときだった。前庭での夕食や、リンゴの木から摘んだ酸っぱい果実の味は、今でも鮮明に思い出すことができる。地下室には洗濯機や自転車の置き場もあり、レッサーさんは自転車を使うことを勧めてくれた。確かに自転車を使えば行動範囲が広がるが、サドルの高さがドイツ人向けで私には少し高すぎた。私のように脚の長さに自信がない人には、スパナーを持参してサドルの位置を調整することをお勧めする。実際にタウテスハイムから3kmくらいのところにブリッツの館(写真17、写真18)という建物があり、歩いて見学に行った。見ごたえのある展示が行われていた。これも自転車を利用すれば楽に行けたと残念に思っている。

滞在中に訪れてくれた、ブルーノ・タウトの孫娘クリスチーネ・シリーサンとその娘ジェニー・シリーサン。ジェニーさんは、ドイツの知識人として、また女優としても非常に著名であり、彼女の父オットー・シリーサンは



写真19 タウトの孫、クリスチーネ・シリーサン、その娘さんで女優のジェニー・シリーサンの訪問を受けた際の記念撮影

「緑の党」の創設者であった。彼はタウトの環境保全思想に共鳴し、内務大臣として長く務めた間にドイツの環境政策を次々と形にした。ドイツが今日、環境先進国として知られるのは、彼の功績によるところが大きいのである(写真19)。

註

- 1 : 馬蹄形住宅が建設されたのは1925~1930年である。ドイツは1919年にヴィルヘルムII世が第一次世界大戦敗戦とドイツ革命により、オランダに脱出し、ドイツ帝国は崩壊、ヴァイマル共和国が発足していた。工業化が進みベルリンには多くの工場が建設され、地方から沢山の労働者が職を求めてベルリンに集まつた。しかし住宅は不足しており、このためにGEHAGと呼ぶ住宅協同組合のような組織が誕生した。馬蹄形住宅の発注者もGEHAGである。
- 2 : タウテスハイム(Tauteshheim)はドイツ語のTrautesheim(心地の良い住宅という意味)をモジって名付けられた。タウテスハイムの宿泊は1~4名が可能である。問い合わせは電話+49(0)3060107193もしくはmail@tautes-heim.de

<参考文献>

1. Ben Buschfeld, "Bruno Tauts Hufeisensiedlung" Nicolai
2. 田中辰明、ブルーノ・タウト、日本美を再発見した建築家 中公新書(電子出版)